

第5章： 危機下で子どもへの約束を果たす

ユニセフは人道危機の際に子どもたちを助けるために設立された機関である。時代とともに戦略そのものは変化しているが、危機にある子どもたちを救うという使命は揺るぎない。子どもの生存からジェンダーの平等に関するものまで、ユニセフのプログラム分野すべてに、人道的な行動と危機後の復興支援が組み込まれている。2009年、ユニセフは79カ国で人道復興支援にあたった。ユニセフはまた、H1N1インフルエンザの流行にも対処し、2009年度末までには、90のユニセフ現地事務所がインフルエンザ・ウィルスに対応できるようになっていた。

まもなく改定版の“Core Commitments for Children in Humanitarian Action（人道支援に際しての必須項目）”が発行されるが、これは長期化した人道危機、あるいは緊急事態のもとでのユニセフの準備、対応、早期復興支援を強化するものである。国際基準をもとに、国連内、国連外の人道支援パートナーとの調整を図ることも再確認している（訳注：クラスター・アプローチと言い、それぞれの役割が重複しない形で、より良い成果を目指す支援への取り組み方法）。ユニセフは、世界的には栄養、水と衛生の面でほかの組織を主導し、教育の面では、セーブ・ザ・チルドレン同盟と共に主導している。子どもの保護、ジェンダーに基づく暴力（国連人口基金と共に主導）、保健、ロジスティクス（支援物資の物流管理）、早期復興の面でもほかの組織と協働して活動している。ユニセフは、開発途上の多くの国々に存在すると共に、地球規模の人道支援物資提供ネットワークを持つこと、そして、緊急事態に対応できる能力を拡大することで、多様な人道支援ニーズに即座に対応できるようになっている。

緊急事態に対応するための資源を計画・動員するための重要なツールが、ユニセフが毎年発行する“Humanitarian Action Report（人道支援活



動報告）”である。2009年版では、11億5,000万米ドルが要請されたが、2009年度末までに集まったのは半分以下にとどまっている。報告書は、長引く—ということさらには認識されにくいということであるが—緊急事態下にある子どもと女性に特に焦点をあて、世界の注目を浴びた。ユニセフは、2009年の報告書に記載された36カ国すべてに支援を提供した。拠出の半分は、最大の人道支援が行われている5つの国—コンゴ民主共和国、イラク、ソマリア、スーダン、ジバンプエ—での支援活動に使用された。気候変動に起因すると思われる食料の高騰と食料不安のせいで、何百万もの人たちが生きのびるために人道支援に依存することとなった。国連組織内で運用する回転資金である緊急プログラム基金（Emergency Programme Fund）は、国連以外から入ってくる資金を待っている間に、ユニセフが、緊急事態下ですぐに行動に移ることを可能にする、柔軟で即応性の高い緊急基金であり続けた。

スリランカ：困難な移行期を生きる子どもたち

2009年初め、スリランカでは長期にわたる内戦が激化し、人々が命からがらに故郷を逃げ出した。人々はときに、銃撃に遭い、紛争地帯を出ることも許されなかった。紛争が終結した5月には、国内避難民の数はピークに達した。うち2万8,000人は5歳未満児の子どもたち、9万3,000人が学齢期の子どもたち、妊産婦と授乳期の母親は9,000人に上った。

混乱の中で、何千人もの子どもたちが親とはぐれ、その行方は未だにわかっていないことが多い。身体に障害を負ったり、殺されたりした子どもたちもいた。政府とユニセフが公式に「親とはぐれた子どもたち」と認めた1,314人の子どものうち、586人が年度末までに親との再会を果たした。以前武装勢力と関係があった子どもたち1,060人のうち、親と再会できたのは半数に満たない。再会できなかった子どもたちはリハビリテーション・センターに入れられ、ユニセフが教育、職業訓練、心理社会的支援を提供した。

紛争地帯へのアクセスが極端に制約されていた中で、ユニセフは、膨れ上がる避難民キャンプに支援の矛先を変えた。キャンプには28万人の国内避難民が住んでいた。国連が共同で行っていた人道支援の中で、水と衛生を提供することが主導的

な役割となっていたユニセフの活動により、安全な水と衛生へのアクセスが大幅に改善され、水を原因とする疾病が広がるのを防ぐことができた。ユニセフとそのパートナーは、水の品質を調査し、既存の水が危険と判断したときには、何百万リットルもの清潔な水を運び入れた。トイレやシャワー設備も早急に作られ、衛生キットも広く配布された。

栄養状態を綿密にモニターし、問題を検知した場合には、すぐに必要な行動を起こしたおかげで、5月から12月の間に、5歳未満児の栄養不良を55%低減することに成功した。ユニセフは、2万1,000人の子どもたちと2,700人の妊産婦に微量栄養素の補給剤を提供し、5歳未満児2万7,000人を対象に、はしかとポリオの予防接種キャンペーンを実施した。

教育への支援は優先され、ユニセフが提供した教材のおかげで、避難民の子ども8万人が学習を続けることができた。

2009年12月半ば現在、16万8,000人以上がキャンプを離れることができ、残りの人たちも故郷に帰る日を待ち望んでいる。

災害のあとの保護と治安維持

2009年には、再び多くの台風、洪水、大地震がアジア・アフリカ地域を襲った。被害を受けた人の数は、1,000万人近く、うち40%は子どもであった。ほかにも、エルサルバドルでは7万5,000人が洪水の被害を受け、ブルキナファソでは13万人（ほとんどが女性と子ども）が、地元の学校に避難した。

2カ月の間に、フィリピンは熱帯性低気圧と2つの台風に襲われ、70万人が避難した。ユニセフはコミュニティによる子どもの保護ネットワークの設置を手伝い、5万人の子どものために心理社会サービスを提供しようとボランティアを動員した。また、親や保護者とはぐれた子どもたちの家族を追跡調査

するために、政府とパートナーシップを組んだ。

9月には、2回の大地震がインドネシアを襲い、130万近い人たちの生活に影響を与えた。ユニセフは政府と緊密に連携し、14万1,000人の子どもにはしかの予防接種を実施した。はしかは、自然災害後に、特に5歳未満児がかかりやすい病気であるが、予防接種で簡単に防ぐことができるからである。5万世帯には、安全な飲み水が提供され、一番被害がひどかった5つの地域では、保健員やコミュニティのメンバーが集められ、子どもと乳児に対する安全な食事のさせかたについて広報した。津波が襲ったサモアの子どものたちに対しては、緊急のはしか・風疹の予防接種と共に、ビタミンAの投与を2万7,000人に対して行った。

緊急時において、子どもたちや子どもたちの面倒をみている人々の苦痛を取り除くための支援を実施する——ユニセフの使命

ブルキナファソでは、洪水が引き始めると同時に、ユニセフが、バック・トゥー・スクール（「学校に戻ろう」）プログラムの開始を支援した。ユニセフは、臨時の教室の提供や140校の学校の修復を行った。また、机や椅子を子ども3万人分提供。250人の教師には心理社会的支援の研修を実施した。エルサルバドルでは、ペットボトルに入った水、レクリエーション・キット、「箱に入った学校（教育キット）」と個人用の衛生キットを提供した。ユニセフは現在20の政府機関やNGO（非政府組織）と協働し、衛生関連のインフラの修復と再建を行っている。

紛争の害を最小限に留める

2009年に終わった紛争がいくつかある。例えば、スリランカでの紛争である（26ページの囲み記事を参照）。このほかに、くすぶり続けた紛争も、また新たな暴動に発展した紛争もある。例えば、2009年度初めに起きたガザでの紛争である（28ページの囲み記事を参照）。これらの危機は大変深刻なものであったが、ユニセフは、子どもの生存、教育、保護など、様々な事業分野で支援を実施した。

2009年初め、スーダン北部で、紛争に追い討ちをかけた飢饉と食料不安が起きると、50万人近い



紛争によって避難生活を余儀なくされた子どもたちに対し、学校で食事が提供された（スリランカ）。

子どもたちが深刻な栄養不良に直面した。このとき、16のNGO（うち6つが栄養に重点を置いた組織）が立ち入りを禁止された。ユニセフはこのとき、ほかの組織に代わり、2万7,000人の子どもたちのために、臨時の食料センターや外来の栄養センターの運営を続けた。5歳未満児640万人にポリオの予防接種を実施し、460万人の子どもたちをマラリアから守るために、殺虫剤処理を施した蚊帳を230万張（記録的な数）配布した。

イエメンでは、反政府活動により17万5,000人が故郷を逃れざるを得なかった。ユニセフは、アル・マズラク・キャンプに学校を設置し、2,000人の国内避難民の子どもたちのために安全な学習場所を確保した。2009年、学習意欲と脳の発達を促進する早期幼児開発キットが、6歳未満の子どもたちのために開発された（29ページの囲み記事を参照）。キットは、50人用である。中央アフリカでの緊急教育支援により、武装勢力間の衝突の影響を受けながらも、10万人の子どもたちが教育支援を受け、就学率は、危機が起きる前のレベルまで回復した。ジンバブエでは、政情不安により、公的なサービスが大きな損害を受けたが、ユニセフは、2008～2009年に起きたコレラの流行を抑え込む努力の一環として、パートナーと共に、衛生を推進し、衛生的な水を提供した。

ソマリアでユニセフは、コミュニティを主導し、各地386カ所に「子どもの保護委員会」を設置した。この組織は、暴力を止めるために活動し、知識を持った支援者たちのバックアップを受けて、暴力の犠牲になっている子どもたちを探し出し、子どもたちが医療、法的、心理社会サービスを受けられるように活動している。コンゴ民主共和国で、ユニセフは、避難民キャンプの11万5,000人の子どもたちを対象に「子どもに優しい空間」（子どもの面倒をみて、安全な空間で遊ばせる場所）を設置する手伝いをした。NGO（非政府組織）と国際赤十字委員会とのパートナーシップにより、ユニセフは、親とはぐれてしまった子どもたち2,000人以上に支援物資を提供し、家族との再会を支援した。アフガニスタンでは、地雷が残存する22の州で安全に遊べる空間を

設置し、1万4,000人に地雷回避教育を実施した。

正常な生活への移行

ユニセフの人道危機に対する対応は、復興と正常な開発を考えに入れている。ブルンジでは、2005年に紛争が沈静化した。難民と国内避難民の大量移動が続いた。紛争中、人道支援物資を提供し続けたユニセフは、現在、子どもたちを学校に戻す努力を通じて（2009年には、学校に行くことができないでいた2万5,500人以上の帰還民の子どもたちが、特別な補講クラスに参加した）次世代にとって

より良い、新しい基盤ができるよう支援している。就学率が最も低い3つの州で展開したキャンペーンのおかげで、1万3,000人の中途退学者が学校に戻り、就学該当年齢より上の年齢の子どもたち3万8,000人が1年生として就学した。

2008年に起きた中国四川省での大地震では、8万8,000人が死亡あるいは行方不明となった。中国政府は、復興のための資金を持っていたものの、将来的に起きるかもしれない自然災害が、今回ほど多くの犠牲者や被害者を出さないよう、ユニセフの専門知識を求めた。ユニセフは、四川省の子どもたちへの初期緊急支援を終えると、教育省と組み、地

パレスチナ自治区：子どもを助ける

2009年初めに起きた3週間にわたるガザでの衝突で、350人の子どもが命を失い、1,600人が負傷した。学校、保健施設、水と衛生に関連する主要インフラなど、ガザのインフラのほとんどが損害を受けた。

ユニセフはすぐに人道支援を提供できる態勢にあった。ユニセフ以外の国連組織を主導し、教育の回復、水と衛生の緊急確保、標準的な栄養の確保、子どもたちをさらなる害から守る活動を実施した。

衝突の勃発後、ユニセフは早期に救急キットや緊急医療キット、必須薬品、浄水剤をガザに運び入れるようにした。テントや「箱に入った学校(教育キット)」などの緊急教育資材も提供し、子どもたちが少しでも正常な生活を続けられるようにしたのである。ユニセフとそのパートナーは、学齢期にある20万人以上の子どもたちを支援した。

ユニセフは、活発なメディア報道やアドボカシー（政策提言）を通して、子どもたちがどれほどまでに影響を受けているかを、世界中に知らせた。ガザを訪れた人の中には、子どもの保護を訴えかけた、国連の「子どもと武力紛争に関する国連事務総長特別代表」であるラディカ・クマラスワミ氏、ユニセフのアン・M・ベネマン事務局長（当時）、ユニセフ親善大使であるミア・ファローや、マームード・カビリがいた。

ユニセフはまた、心理社会的サービスを拡大し、詳細なカウンセリング、制度化されたレクリエーション活動をガザの各地で実施した。研修の陰で、心理社会的サービスを提供する人たちは、子どもたちを確実に保護し、心の傷を癒す能力を強化することができた。子どもを対象にしたラジオ・プログラムと、20万部の冊子状のチラシで、残存する地雷や不発弾の危険性を知らしめた。

ユニセフが設置した水のタンク（水槽）のおかげで、135校、11万人の児童・生徒が衛生的な飲み水を手に入れることができるようになり、脱塩装置の設置により、高濃度の塩素や硝酸塩を除去できるようになった。急性の栄養不良を回避するため、ユニセフは53の保健クリニックを通して、母親と子どもに微量栄養素や栄養強化した食料を提供した。

教員が使う教師用の資材の品質と支給状況は、ユニセフが提供する数学・科学教材キットにより改善された。困難な状況にある若者を対象にしたプログラムでは、心の傷を癒すことを目的とした学習の支援、ストレスの解放、ライフ・スキルを中心とした教育の展開、民間の活動に参加する機会などを提供した。ユニセフと、ほかのパートナー機関との秩序立ったアドボカシー（政策提言）を通して、参加者の半分近くが女子となった。1年以上たった今も、この努力は続いている。

小さな子どもたちのスキルを育てる緊急キット

子どもの脳の発達にとって、早期幼児期はとても重要な時期である。紛争や自然災害などを経験し、感情面、身体面で混乱をきたした小さな子どもたちは、一生涯続く損傷を受けかねない。

このリスクを軽減するために、ユニセフは、6歳までの子どもを対象にした早期幼児開発キットを2009年に開発、発表した。このキットは、子どもたちが普段どおりの正常な生活を取り戻せるよう支援するものである。中身は、身体的、感情的、社会的、精神的発達を促進するよう作られており、ゲーム、色鉛筆、積み木、指人形など、37種類の品物が入っている。

ユニセフはキットの中に何を入れるか、慎重に検討し、実際に子どもに使ってもらい試してみた。子どもたちが、キットの中身を使い、遊び、お絵かき、物語り、数字遊びなどを通して、頭を使い、面倒をみる人たちや友達たちと絆を深めることができるかどうかをみたのである。

どのような文化圏でも使えるよう、キットに

は、ジェンダー面での偏見を助長するもの、男女別に作られたものは入っていない。また、子どもの面倒をみる人たちのための使用手引書が入っている。

早期幼児開発キットは7月に発表されたが、これは過去の「箱の中の学校」や「レクリエーション・キット」の成功の上にできている。これら3つのキットは、緊急事態以外にも、資材が整わない地域での格差に対処するためにも使われる。緊急事態下では、これらのキットには、子どもたちが必要な物が入っており、教育の早期回復が可能のように、あらかじめ箱詰めされている。

2009年、これらのキットは、ガザやスーダンのダルフルで起きている危機の影響を受けているチャドの一部地域などに配られた。ブルンジやザンビアでは、コレラの流行に対処するために配られ、サイクロンに襲われたフィジー、津波の被害に遭ったサモアでも配布された。ユニセフは、35カ国から、2,300件の要請を受けた。



震の多い地域に再び地震が起きたときに即刻更新できる、子どもの予防接種に関する最新のデータベースを構築した。2009年、中央政府はデータベースを全国的に広め始めた。ユニセフは、また、災害に強い学校建設に関する国家ガイドラインの作成と、学校の安全と訓練に関するガイドラインの作成にも寄与した。

アジアとアフリカ東海岸を襲った、インドネシア

のスマトラ島沖地震から5年。復興事業はほとんど完了、あるいは国家開発戦略の中に組み込まれた。モルディブでは、トイレからの排泄が飲み水に混ざらないよう、ユニセフが設置を支援したバキューム式のトイレシステムを、地元の当局者たち自身が管理している。ユニセフが津波被害の後に行った助言を元に、政府が作成した早期幼児教育開発プログラムには、2009年段階で、就学児童の99%が参加している。